



# 『えりざのまどゐ』と徳川頼貞の小説「麗日記」

林 淑 姫

南葵音楽文庫  
和歌山県立図書館内  
和歌山市西高松 1-7-38  
tel.073-436-9500

2019年7月7日(日) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)



ヴィラ・エリザの家  
『薈庭楽話』(1941)

徳川頼貞は、1923(大正12)年夏、周囲の文学青年たちのために『えりざのまどゐ』を発刊した。当初、年2回刊の同人誌として計画されたが、創刊号刊行直後の関東大震災は環境を激変させ、継続は許されなかった。第2輯が刊行されたのは3年後のことである。

誌名はおそらく頼貞の命名による。頼貞は上大崎の自宅に、ヴァーグナーの歌劇「ローエングリン」の王女エルザにちなんで「ヴィラ・エリザ」と名付け(1921年芝三光町から転居)、海外の音楽家や名士たちを招き、サロンでの音楽会もたびたび催した。ホルマン、ゴドウスキー、クライスラー、ジンバリストたちがこの邸で寛ぎ、演奏を披露したことは頼貞の回想に詳しい。客人たちとの交際や接待とともに、彼のもとに何ということなく集まってきた青年たちとの会話は頼貞を喜ばせたようである。頼貞は思索すること、書くこと、旅することの意義を彼らに伝え、そのための費用を惜しまなかった。青年たちとともに、頼貞自身も2号にわたって小説を寄稿している。私たちは彼のもうひとつの貌をみることになるだろう。

『えりざのまどゐ』は2号を以て刊行を終えた。



『えりざのまどゐ』第一輯  
大正12(1923)年8月1日刊  
(B914.6/18)

えりざのまどゐ *La Soirée d'Elisa*

第一輯(1923年春/1923.8) 第二輯(1926年春/1926.6)

編集兼発行者 内山俊夫(I) 喜多村進(II)

発行所 ヴィラ・エリザ 東京市外上大崎三三一

奥付の書名 エリザの戀(I) エリザのまどゐ(II)

64p(I) 153p(II) 19.0×13.0cm.

## 【目次】

### 第一輯

序辞	すゝむ
麗日記	よりさだ
マニラだより	すけつぐ
十八日間(小笠原紀行)	
歌二つ	としを
山荘の出来る頃	としを
小笠原帰化人の住宅	あづま
朱筆を擱いて	としを

### 第二輯

序詞	すすむ
二年ニナッテ	ヨリアキ
古文明の跡を尋ねて	かなめ
英吉利たより	すけつぐ
英吉利たより	あづま
麗日記	よりさだ
鎌倉の思ひ出	ゆきじ
パイプ(ボードレール)	としを
スカンジナビアの旅	すけつぐ/あづま
北日本をめぐる	すすむ
編集後記	すすむ

えりざのまどゐ！  
私どもはこゝでのみ私ども自身のまことの姿を見  
る。繁瑣な世俗の生活にまだ濁されぬ心を願ふことも  
できる。さらに青い花を尋ねまはる水遣の春をすらす  
らひ得られる。私どもはこゝでのみ一様に話もする笑  
ひもする夢へもする。さうすることが、乾からびやす  
い心をうるほし、常に清新ならしめること、信じる。  
今、私どもは、樺の宿水にかこまれたツイフ・エリザ  
にあつまり、その樹繁のすきまから高い空を仰いでゐ  
る——えりざのまどゐの、生長を祈念しつゝ——  
——すすむ——

第一輯・序辞(喜多村進)

### 小説「麗日記」について

『えりぎのまどみ』に連載されたこの作品は、頼貞には珍しい小説体をとって発表された。冬のスイスを背景に語られる金髪の美少女ルイズと日本の青年公爵のロマンスは、最初に日本で出逢ったときのエピソードを含めて、青年特有の気負いや不安、美しいものへの憧れなどを自然描写に溶け込ませて描き出し、どこか19世紀ロシアの小説を思わせるところがある。『まどみ』の創刊号と2号の間には3年の年月が横たわっているのだが、作品の流れは極めて自然、執筆の間の時間的断絶を思わせることはない。作者自身の作品への愛着の所以であろうか。しかし、『えりぎのまどみ』が2号で終刊したこともあり、作品も連載2回で完結。その後小説が書かれることはなかった。

小説の背景となったスイス・ローザンヌへの旅は、ケンブリッジでの学業が開始される直前の1914（大正3）年1月2日（ロンドン発）から10日間のことで、上田貞次郎が同行した。パリからほぼ12時間の列車の旅はもの珍しく、スイスへの国境を越えた辺り、眠りから覚めてみた雪の風景は新鮮な驚きであったろう。なにより常々憧れていた地でもある。後年になってもしばしば回顧される思い出深い旅だったようだ。後年書かれた「冬のスイス」（『頼貞随想』）によれば、ローザンヌに招待してくれた「ル・スウィール男爵夫人」には年頃の美しい令嬢がいた。ルイズのモデルは文中にイニシャルで表されるJ. M嬢であろう。但し、スイス紀行文の初出は、1914年6月刊行の『南葵育英会会報』（7号）に掲載された「冬の瑞西」だが、それには少女は登場せず、日本を訪れたことのあるフランス人の友人MM君とその母の招待に応じた、と記される。



ローザンヌ駅前（1910年代）



ローザンヌ市

パリーヴァーローブーローザンヌ  
Paris - Vallorbe - Lausanne

